

論文の内容の要旨

論文題目 ディドロ美学・美術論研究

氏 名 青山昌文

本論文は、フランス18世紀の思想家ドゥニ・ディドロの美学・芸術理論並びに美術論・美術批評を考察の対象として、その美学・芸術理論・美術論・美術批評が、通俗的意見に反して、内部に矛盾を孕んでおらず、極めて理論的・哲学的に一貫したものであるということを明らかにすることを第一の目的とするものである。

本論文は、しかしながら、ただ単に、ディドロの美学・芸術理論・美術論・美術批評が全体として無矛盾であるという、いわば消極的な結論を導出することのみを目的としているものではない。より積極的に、ディドロの美学・芸術理論・美術論・美術批評が、プラトン・アリストテレスによって代表されるヨーロッパの古典的美学・芸術理論の伝統を正統に受け継いでそれを深く踏まえたものであり、そして、そうであるがゆえに、カント以降のドイツ観念論美学に典型的な近代主観主義を乗り越えるために有効な資源＝力を豊かに内に秘めていて、この意味において、近代にありながらも近代を越える力を我々に提供しているものである、ということを明らかにしようとするのが、本論文の第二の、より深い目的である。

カント的な近代美学は、現代においてさえも、基本的には大きな影響力をいまだに失っていない美学である。しかし、あるいはそれゆえにこそ、美学においても、近代以降の物の考え方——例えば、近代的な「特権的主体」や「偉大な創造的主観性」の神話——を根本的に乗り越えること、即ち、近代の乗り越えが、今日まさに要請されているのであり、この点において今日ますますその重要性が明らかになっている美学の一つが、ディドロの美学なのである。

この、近代的な「特権的主体」や「偉大な創造的主観性」の神話を根本的に乗り越えることは、まさしく学問としての表象文化論のめざすことの一つであると言えるであろう²¹。本論文は、それゆえ、表象文化論の最も根幹をなす概念である「表象」(représentation)の古典的基盤の解明を通じて、現代の知としての表象文化論と、プラトン・アリストテレス以来のヨーロッパの古典的美学・芸術理論との接点を、ディドロにおいて、明らかにしようとするものでもある。

考察の順序は、ディドロのごく近い周辺においてさえも見受けられた主観主義の潮流の概観から始まる。モンテスキューにおいて相当程度に強まったその主観主義への傾斜が、ドイツにおいても見られることをその次に述べて、バウムガルテンのその点に関する決定的転回を検証した後に、そのような後期バウムガルテンと決定的に異なるディドロ美学の、超近代主観主義的な、美の哲学的原理論を、詳しく見てゆく。

次に、そのディドロの美の哲学の基礎の上にはっきりと打ち立てられているディドロの芸術哲学について、その芸術創造理論を中心に詳しく見てゆき、ディドロの芸術哲学が、超近代主観主義的な実在論であり、実践的な制作の立場に立ったミーメーシス哲学であることを明らかにする。

そしてその次に、以上の、ディドロの美の哲学と芸術哲学が、最晩年に至るまでのディドロの芸術理論において一貫してその基礎をなしていることを明らかにし、そして最後に、そのような美の哲学と芸術哲学と芸術理論の上に立ってディドロがなした史上初の本格的美術批評の中から、グルーズ論とシャルダン論を採り上げて、通俗的なディドロへの批判——ディドロが道徳的なものや文学的なものを偏重して絵画的なものを軽視した、などという、余りにも流布している、ディドロのグルーズ論への批判——の誤謬を指摘し、ディドロの美術批評が、カント美学とは原理的に全く対立しているものであって、関心の美学の上に立つものであり、強度の美学の上に立つものであることを明らかにし、また、ディドロ自身の〈存在の連鎖〉の自然哲学の上に立つモナド論的な世界ミーメーシス論であり、世界の内なる声のミーメーシス論に他ならないことを明らかにする。

バウムガルテンは、1739年の時期には、美に関して、実在の側の完全性が美であるという古典的伝統的な論定を行っていたのであるが、その後、1750年に至って、彼は、感性的認識の完全性が美である、という根本的な転回をなすようになり、美についての完全な主観主義に転向した。

1745年、ディドロは、『真価と徳に関する試論』において、美は、世界における存在の内に根拠をもっているものであり、そのような存在を本質的な深いレヴェルにおいて模倣 (imitation) することは、単に現象界の具体的存在者を表面的に機械的に模写 (copie) することと全く次元を異にする営みに外ならない、と述べ、また、「宇宙においては全てが結び合わされている」²² と述べ、現実界に現存している存在の内における関係 (rapports) を、現実の存在の法則と呼んだ。更にディドロは、美しい人間とは、身体の調和的な全組織が、最高度に優秀な仕方でもって一致協力して、様々な数多くの機能 (fonctions) を最もよく遂行するような人間に外ならない、と述べているのであって、まさに、1767年のディドロの著名な〈理想的モデル〉論は、1745年に既に、原理的には完璧に提示されているのである。

この関係について、ディドロは、『百科全書』の項目〈美〉において、美学的哲学的考察を行う。ディドロは、プラトンもアリストテレスも明示的には為し得なかった美の哲学的定義を行ったのである。

この項目〈美〉においても、カント的な近代美学と鋭く対立するところの、実在に全面的に根拠をおく美学が提示されている。ディドロ美学においては、美を認識する主観の存在・非存在にかかわらず、自然或いは芸術家によってひとたび美しく形成せられた事物において、美は既にその事物の内に成立しているのである。この超認識主観的な実在論美学を、ディドロは、晩年に至るまで一貫して堅持してゆく。このことは、次の一文によっても明確に確認されることである。

「美しいものは、常にどんな場合でも美しい。変わるのは私の感覚のみである。私がルーヴル宮殿の柱廊の前を、その柱廊を見ることなく通り過ぎる。(その時) その柱廊は、私が見ないということの故に、私にとってより美しくなくなるであろうか。全然そんなことはないのである。」²³

従来この項目〈美〉の美学を論ずる人々の多くは、ディドロが美を〈関係の知覚〉としてとらえたと述べてきているのであるが、現実にはディドロ自身がくり返して力説しているように、知覚する認識主観が存在

していなくとも、或る美しい事物は依然として常に美しいということこそ、ディドロ美学の根幹をなす命題に外ならないのである。

ディドロは、関係について次のように語っている。

「実在的關係がどのようなものであろうとも、正しくその実在的關係こそが美を構成する、と私は主張する。」²⁴

実在的關係が美を構成するという事は、そのダイナミックな意味においては、或る一存在は、その〈一〉の内において〈多〉を再現すればする程、それだけますます濃度の濃い充実した存在となり、それだけますます美しい存在となる、ということの意味しているのである。ディドロ美学において、美とは、〈一〉における多の再現〉としての〈存在の充実した在り方〉に外ならないのである。

〈一〉に重心を置くライプニッツのモナド論に対して、ディドロの存在充実の美学は全く逆に〈多〉に重心を置くものであって、ディドロは、ライプニッツの予定調和論に、自らの、自然の「全てのものを結びつける大なる連鎖」²⁵の思想を代置して、〈一における多の再現〉の思想全体を無神論化したのである。

アリストテレスと全く同様に、ディドロもまた、文学、音楽、美術等の全芸術は、その個別的な媒体・手段に相違はあっても、全てミーメシス＝模倣という一点において共通しており、まさに模倣ということこそが、芸術の本質に外ならないと論定している。

美と真は、根本において同一である。芸術家は、芸術創造において、美を追求するにもかかわらずではなくして、正しく美を追求するがゆえに、機能という、真を根拠とするものを、観念として、最高度に実体構造化させるのであり、そのようにして得た〈理想的モデル〉を模倣することによって、芸術作品を創造するのである。

ディドロは、カントなどとは明確に立場を異にする美学者であって、「あらゆる関心ぬきの満足」などではなく、まさにその反対に、「強烈に関心をかき立てる」力・エネルギーを持っていることを、芸術作品の本来的な根本性格として認めているのである。

〈一における多の再現〉のディドロ美学は、ディドロのシャルダン論において確固とした根本的根底をなしている。シャルダンの為す「自然の極めて忠実な模倣」の究極的な対象たる〈自然の真なる本質〉とは、世界の複合的な一体性なのであり、実在的自然における全存在の連鎖という、世界の全体的にして複合的な在り方そのものなのである。

シャルダンは、見事に、生の本質をミーメシスし、世界の内なる声を、自らが描いた存在から発声させることに成功している。そしてディドロは、高度に哲学的なモナド論的世界模倣論の上に立って、芸術作品から聞こえてくる、世界の内なる声を、言葉による自立的な構築物に更にミーメシスすることを成し遂げ、世界初の、本格的な意味での、美術批評を創始したのである。

- ^{註1} 渡邊守章『表象文化研究——文化と芸術表象』（放送大学教育振興会、2002年）3頁。
- ^{註2} Denis Diderot, *Œuvres complètes*, Paris, Hermann, t.I, 1975, p.313.
- ^{註3} Denis Diderot, *Œuvres*, Paris, Robert Laffont, t.I, 1994, p.908.
- ^{註4} Denis Diderot, *Œuvres complètes*, Paris, Hermann, t.VI, 1976, p.162.
- ^{註5} Denis Diderot, *Œuvres complètes*, Paris, Hermann, t.IX, 1981, p.32.